

平成 2 1 年 4 月の解説（週間天気予報）

【4月の天候状況】

上旬は高気圧に覆われほぼ全国的に晴れる日が多かったですが、沖縄地方では寒気や前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。中旬も引き続き晴れる日が多くなりましたが、本州付近は中頃に低気圧の通過で荒れた天気となりました。下旬は旬初めと中頃に低気圧が本州付近を発達しながら通過したため荒れた天気となり、北日本では大雨や大雪となったところがありました。また旬初めの低気圧の通過後は日本付近に強い寒気が入り、それまでの高温から一転して低温となりました。

月を通しての日照時間は沖縄地方で平年より少なくなりましたが、その他の地方では平年よりかなり多くなりました。降水量は北日本の太平洋側で平年より多くなりましたが、東・西日本では平年より少なくなりました。気温は南西諸島で平年より低くなりましたが、その他の地方は平年より高くなりました。

【4月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は全国平均では例年（注）より 14 ポイント高く 83%でした。ほとんどの地方で 10 ポイント以上高くなり、特に北日本では 18 から 19 ポイント高くなりました。最高気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は例年に比べてほとんどの地方で大きくなり、特に関東甲信地方と近畿地方から九州地方北部で 0.5 から 1.2 大きく、全国平均では 0.6 大きい 3.5 でした。最低気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は例年に比べて全国的に小さくなり、特に関東甲信、北陸、九州地方で例年より 0.5 から 0.7 小さく、全国平均では例年より 0.4 小さい 1.9 でした。

（注）例年値は気象庁 H P（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【4月の週間天気予報から】

4月に低気圧の影響で関東地方に雨の降った日のうち、14日と21日の事例について、それぞれ図1と図2に示します。2つの事例とも、本州南岸を低気圧が通過したため、関東地方を含め、本州の広い範囲でまとまった雨となりました。

このうち、14日に対する予報に使用した資料の1つが図1の右です（例として4日前＝10日の予報で使用したものを掲載）。この資料などから、低気圧はこの日はまだ西日本付近と予想して、関東地方にまで降水は及ばず、15日になってから影響を受けると判断しました。2日目の予報まで同様の見方を続けたため、結果として14日の雨を見逃してしまい

ました。

一方、21 日に対する予報については、図 2 の右の資料（図 1 と同様、4 日前 = 17 日の予報で使ったものを例として掲載）などを用いましたが、低気圧のコースや通過のタイミングなど 7 日前から概ね実況に近い気圧配置を予想することができ、雨の予報が適中しました。

最近の週間天気予報の技術では、日本付近に大きく影響するような低気圧は概ね予想できるようになってきました。しかし、上で示したように、通過のタイミングの予想が半日～1 日程度ずれたりすることがあり

ます。発達や通過コースにややずれが生ずる場合もあります。

週間天気予報をご利用の際は、前後の日を含めた天気や降水確率、信頼度（A、B、C の順で予報が変わる可能性がやや高くなる、もしくは降水の予報の適中の可能性がやや低くなる）の情報も参考にしてください。

【6 月の週間天気予報の利用にあたって】

6 月は梅雨前線が本州付近に数日以上停滞することが多く、梅雨前線付近の地方では曇りや雨の日が続きしばしば大雨が降ります。梅雨前線が少し北上すると、太平洋高気圧に覆われて蒸し暑い夏の天気になり、少し南下するとオホーツク海高気圧からの冷たい北東の風が吹いて、太平洋側の地方を中心に梅雨寒で曇りがちの天気になります。

このように梅雨前線の位置のわずかな違いで天気が大きく変わりますが、梅雨前線の南北の変動の予想は、日本全体を覆うような大きさの低気圧の移動の予想に比べて大変難しいものです。梅雨に週間天気予報を利用する際には、最新の天気予報で確認するようお願いします。

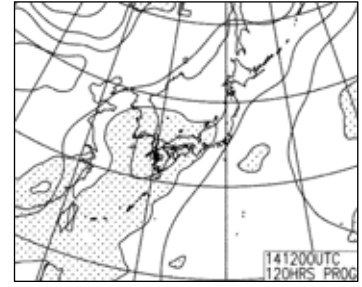
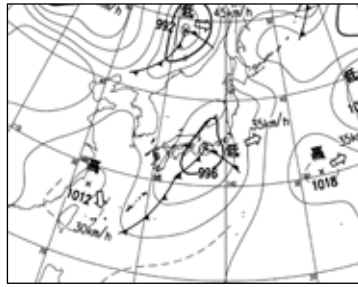


図 1 2009 年 4 月 14 日 21 時の地上天気図（左）と、4 日前の予報でこの日の予報に用いた地上予想図（右。水玉模様は降水の予想）

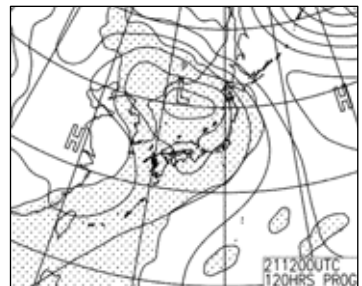
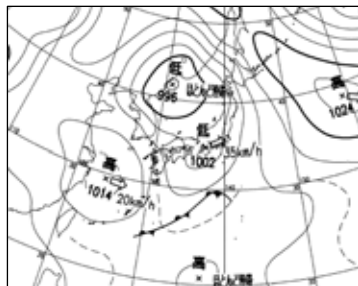


図 2 2009 年 4 月 21 日 21 時の地上天気図（左）と、4 日前の予報でこの日の予報に用いた地上予想図（右。水玉模様は降水の予想）